

第5回 JRRN 河川環境ミニ講座 講演録

～流域連携による河川再生 イギリス・マージ川流域キャンペーン～

講師：Walter Menzies 氏（英国・マージ川流域キャンペーン MBC 専務理事）

2010年5月11日（火）開催



- 行事名 : 第5回 JRRN 河川環境ミニ講座
演 題 : 流域連携による河川再生 イギリス・マージ川流域キャンペーン
講 師 : Walter Menzies 氏 (英国・マージ川流域キャンペーン MBC 専務理事)
開催日時 : 2010年5月11日(火) 14:00~16:00
開催場所 : 財団法人リバーフロント整備センター 会議室
(東京都中央区新川1丁目17番24号 ロフター中央ビル7階)
主 催 : 日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN)、財団法人リバーフロント整備センター
定 員 : 20名
参加費 : 無料

講演要旨

「マージ川流域キャンペーン(Mersey Basin Campaign)」は、政府主導で1985年に始まり、2010年3月までの25年間に渡り続けられた、イギリス北西部における河川、運河、河口の浄化と再生の事業です。1970年代から1980年代にかけて、マージ川は西ヨーロッパで最も汚染された河川の一つとされていましたが、世界で初めて統合的再生を目指した流域管理手法が適用され、世界を代表する河川・流域再生の成功事例となりました。

本講演では、マージ川流域キャンペーン専務理事であるWalter Menzies氏を講師にお招きし、マージ川における行政・民間及びボランティアレベルでの個人及び組織のパートナーシップ(連携)を軸とする河川・流域再生の経験とその成果についての話題をご提供頂きました。

講演録

0. 主催者あいさつ (佐合純造: JRRN 事務局長)

これより、JRRN とリバーフロント整備センター共催により、今年度は第1回でございますけれども、第5回 JRRN 河川環境ミニ講座を開催させていただきます。

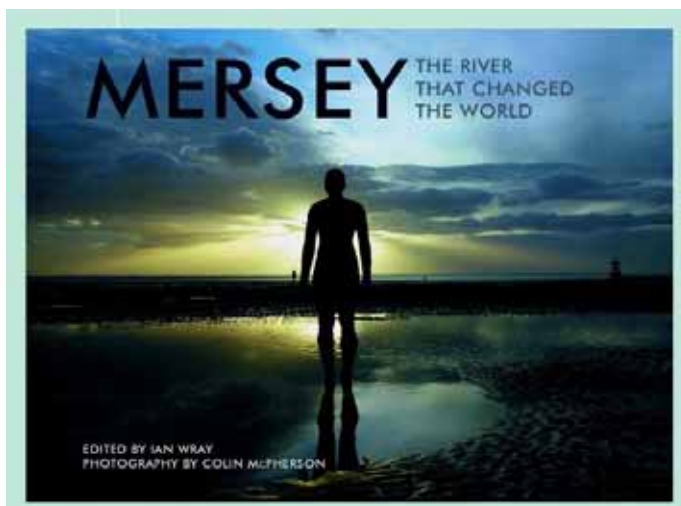
今日は、イギリスから、既に前にお座りの、マージ川の流域キャンペーンの専務理事をお勤めしておりますウォルターさんに来ていただきました。ウォルターさんは、実は本行事が主目的ではなく、あさってからでしたね、名古屋のほうでCOP10に関連しまして、COP10は10月に開催されますが、その前のプレイベントということで国際ワークショップがございまして、その講演のメンバーとして呼び寄せられたのを、名古屋だけではもったいないということで、東京に寄っていただきまして、今日、講演をしていただくことになりました。

ウォルターさんの紹介については、多分、講演の中にも出てくると思いますけれども、私も詳しいことはわからないので、省略させていただきます。今日のお話はイギリスの中でも非常に大きな川というか、水質も含めて、一部が人工化された、イギリスのマージ川を20年ぐらいかけて市民と行政とが一体になってきれいにした活動をいろいろ報告されると聞いております。

日本でも、今、いろいろな川についてそのような活動が進められているわけでございますけれども、多分、イギリスの先進となる事例が、日本の国内のいろいろな事例でも参考にされて進められているケースが多いのではないかなと思います。そういう意味では、ここで改めて、今のイギリスの河川の再生というか、流域再生の状況をここで話を聞かせていただきまして、さらにこれからの日本の河川の再生に関して是非いい方向になることを、ここに来られている方々を含めて聞かせていただきまして、その後、少し議論もさせていただければと思っております。

講演のほうは1時間ぐらいを予定しまして、その後1時間ぐらい、参加者の皆様とのディスカッションができればと思っておりますので、よろしく申し上げます。

1. マージ川とマンチェスターの概要

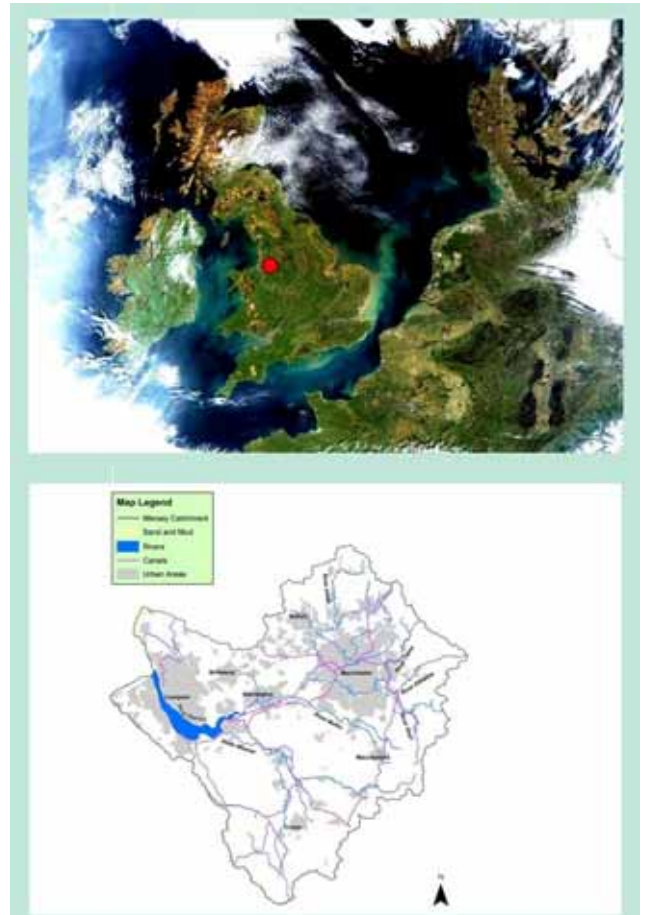


今回、東京にお招きいただきまして、ほんとうに大変うれしく思っています。今朝、ご親切にいろいろなところを見せていただきました。今、いろいろ見せていただきましたところ、東京とリバプールでは本当にたくさんの共通点があるなということに気づかせていただきました。ですので、私は既に皆さん方からいろいろなことを学ばせていただきましたので、今日、私の話で皆さんが少しでも何か学んでいただければと思っております。

今日の私の話は、過去25年間に対して行われたマージ川流域のキャンペーンによって、いかにこのマージ川が劇的に変わったのか、そういうことについてお話ししたいと思います。

私はこのキャンペーンの中でチーフエグゼクティブという形で仕事をさせていただきましたので、もちろんこれは私ひとりだけでできたものではありません。これだけ劇的に変わるということは、私だけではなくて、いろいろな人たちがかわかって可能でした。

これはイギリスの衛星の図になりますけれども、赤い点で示されているものが、イギリスの北西部にありますマージ川の位置になります。その、先ほど言いましたところがリバプール、河口部分、マンチェスターですけれども、ここに出ているのが、マージ川の集水地域になります。



マージ川は112kmの長さにとりまして、また、盆地、その流域は4,600km²にわたるものになります。そして、約800万人の人が住んでおりまして、その中には、先ほどお見せしました2つの大きな都市があります。マンチェスターとリバプールで、マンチェスターに250万人、リバプールに150万人という形になります。



これは 19 世紀の絵になります。実際、1707 年に初めてリバプールに係船ドックが建てられました。世界で初めてです。そして、18 世紀、19 世紀に、このマージ川の集水地域が初めての集中した産業が行われる、産業の地域になりました。そういった意味でも、マンチェスターは世界で初めての産業都市、また、大英帝国にとって、大西洋に行く最初の玄関になりました。そして、そういった産業革命のためには、リバーシステム、川のシステムが絶対になくなくてはならないものでした。水の供給、エネルギー、交通、また、廃棄物の処理、そういった意味でも川のシステムが非常に重要です。



産業革命はイギリスの北西部に非常な富をもたらしたと同時に、貧しい人もつくってしまいました。そして、居住も、狭いところに多くの人々が住んで、また、空気などの汚染もあり、不健康な状況、そして、寿命も短いと、そういった状況が起きていました。

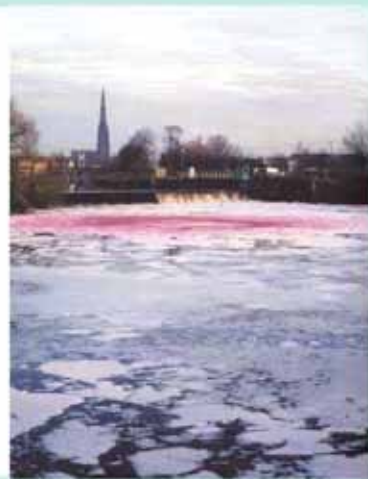


そして、1980 年まではリバプールも非常に衰退してしまいました。イギリスの多くの都市がそうだったのですけれども、大きな衰退が見られてしまいました。特にリバプールは経済的な衰退が激しく見られまして、そして、高い失業率にも悩んでいました。1981 年にリバプールで動乱が起きました。これはイギリスにとって、100 年間で最もひどい動乱、そういったものがリバプールで起きてしまいました。これはリバプールの街のちょうど真ん中の建物がこういった状態で燃えてしまっているんですけれども、こういったひどい状態だったということです。

The Problem

"Today the river is an affront to the standards a civilised society should demand of its environment. Untreated sewage, pollutants, noxious discharges all contribute to water conditions and environmental standards that are perhaps the single most deplorable feature of this critical part of England."

Michael Heseltine, 1983

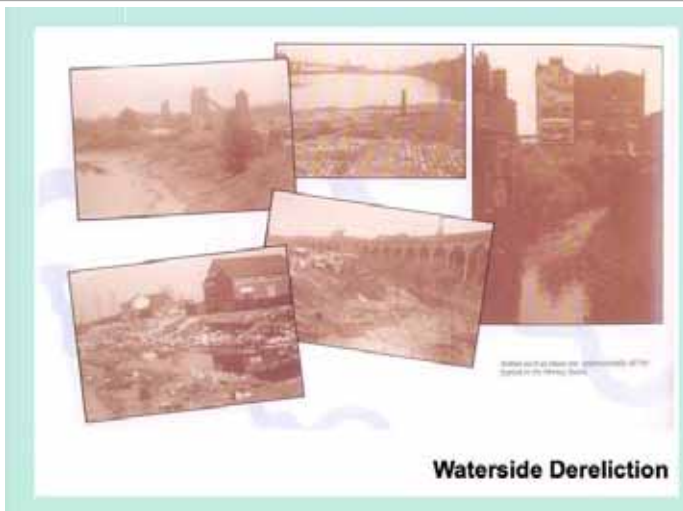


マンチェスターも本当にひどい状態でした、その当時、サッチャー氏が総理大臣だったのですけれども、サッチャー総理が環境大臣をリバプールに送るということをいたしました。ここに書かれているのが、サッチャー時代の環境大臣のマイケル・ヘゼルタインが 1983 年に話したスピーチの中で、いかにこれがひどい状態なのか、マンチェスターでの汚染の状態について話した有名なスピーチからの引用になります。この川の色を見ていただくと、ひどい状態だというのがわかると思います。

Water Quality in the Mersey Basin 1984



これは 1984 年のマージ川流域のところで水質がどうい状態なのかを示したものになります。赤で示されているところ、これは水質が非常に悪い状態、いかにそれがひどいかというのがわかります。川の部分だけではなく、運河もそうなんです。特に 1880 年につくられたシップカナルというマンチェスターにつながっている運河があるんですけれども、その状態も非常にひどい状態、赤く示されて、水質が悪い状態になっているというのがわかります。



そして、川、運河だけではなくて、崩壊されて、また、廃墟となった建物もほんとうにたくさんありました。また、こういった土地の部分でも非常に汚染、そのまま非常に荒廃しているので、そういった状態によって川が汚染される、そういった大きな問題も引き起こしていました。

2. マージ川流域キャンペーンの概要

The Challenge

"To rebuild the urban areas of the North West we need to clean and clear the ravages of the past, to recreate the opportunities that attracted earlier generations to come and live there and invest there..."



A Mersey Basin restored to a quality of environmental standards fit for the end of this century will be of incalculable significance in the creation of new employment."

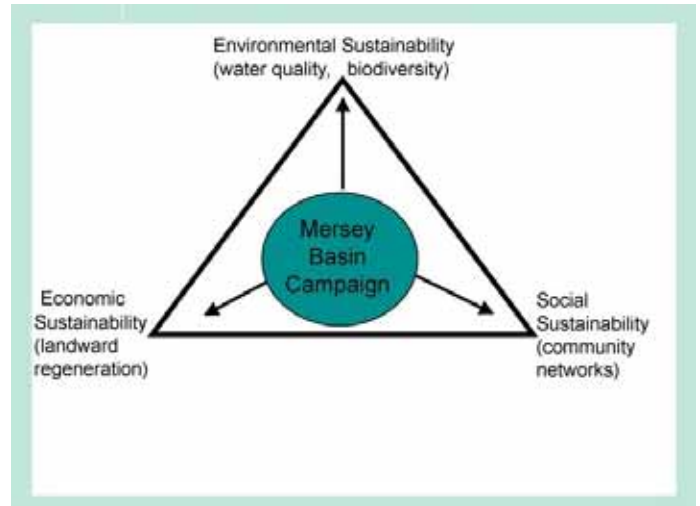
Michael Heseltine, 1983

そういった状態に対応するために、マイケル・ヘゼルタインがマージ川流域キャンペーンを行ったわけです。最初から、マージ川流域のキャンペーンというのは、経済的なものをよりよくしようと、そういった目的がありました。ここに実際にヘゼルタイン大臣がおっしゃった言葉が書かれています。マージ川流域が、the end of this century、20世紀末にふさわしい、高い環境の水準を取り戻すということは、新しい雇用を生み出す上で計算できないほどの意味を持つだろうと。

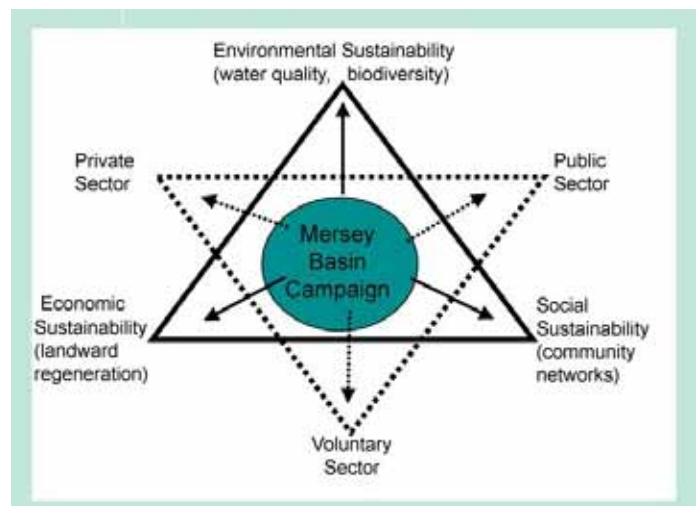
Aims

- to improve **river water quality** across the Mersey Basin to at least a "fair" standard by 2010 so that all rivers and streams are clean enough to support fish
- to stimulate **attractive waterside developments** for business, recreation, housing, tourism and heritage
- to encourage people living and working in the Mersey Basin **to value and cherish their watercourses** and waterfront environments

このマージキャンペーンは3つの目標を持ちました。その1つ目は、2010年までにマージ川流域一帯の水質を最低でもフェア、かなりいい状態に改善して、そして、すべての川、小川に魚がすめるような状態にする。2つ目の目標は、ビジネス、レクリエーション、そして、住宅、環境、歴史的な遺産のために、魅力的な水辺の開発を行って、刺激を行うということです。そして、3つ目は、マージ川流域に住む人たちが、水路、また、水辺の環境を大切に思い、大事にするように、そういったことを促していく。



マイケル・ヘゼルタインがこういった話をしたときには、維持可能な、sustainableという言葉はまだなかったのですけれども、実際に彼がやろうとしていたのは、この sustainable、維持可能な開発になります。皆さんはもう既にご存じだと思うのですが、まず最初に経済的な改善、また、環境的な改善、社会的な改善、この3つです。この維持可能な開発、sustainable development のためには、パートナーがしっかりと協力して行うということが重要になってきます。



そのパートナーは、プライベート これは一般の企業、ビジネス、そして、パブリックセクター これは政府とか地方自治体、そして、下のところですが、ボランティア これはコミュニティーの地域の人たち、そういったパートナーの人たちが一緒になってこのキャンペーンを行うということが不可欠です。

TIMESCALE

Mersey Basin Campaign:
25 Year Programme 1985-2010



そして、タイムスケール、つまり、どのぐらいの期間行うのかということが非常に重要です。これは非常に大きな規模の事業ですので、最初から、1985年から2010年という長い期間、25年間のプログラムということで始められました。その当時、25年間という長い期間にわたるようなプログラムというのは、政府が行うようなプログラムで今まで全く行ったことがない、それだけの長い期間のものです。でも、私の意見では、これだけの期間を設定したというのは正しかったと思います。

このキャンペーンのやり方ですけれども、どういうふうにやっていくかということで会長なども分析を行って、この5つの動詞を使ってまとめました。

How the Campaign works: five verbs

- **Influencing** opinion and priorities across all geographical levels
- **Enabling** projects to be implemented both by the Campaign and other partners
- **Mediating** between different partners to provide common ground
- **Enhancing** projects to enable added value and encouraging partners to aim higher
- **Communicating** the message of the Campaign and listening to new ideas and concerns

まず1つ目は、影響を与えるということで、地域全体の意見とか優先順位、そういったものに影響を与えていく。そして、2つ目は、可能にするということで、キャンペーンの主催者側とパートナーが協力して事業の実施を可能にしていく。そして、パートナー同士を仲介することによって、共通の土台を提供していく。そして、事業を強化することによって、付加価値を与えて、パートナーがより高い目標を持てるようになる。最後は、これは非常に重要なものになりますが、キャンペーンのメッセージを伝えて、そしてまた、新しいアイデア、懸念には聞く耳を持つてみる。



Influencing: the Mersey Basin Campaign annual conference – an opportunity for all stakeholders to be stimulated, informed and inspired

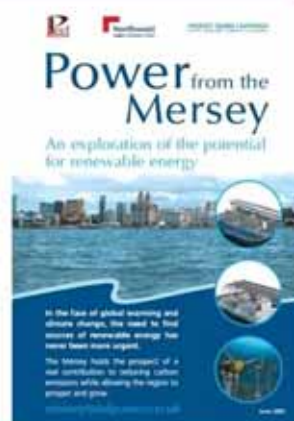
では、それが実際の例でどういうふうに行われたのかということの説明をしていきたいと思います。影響を与えるということで、私たちは大きな年次総会を毎年行い、それ以外にも、多くの人が集まる会議を持ちました。

次に、可能にするということです。これですけれども、そこに出ている写真はアン王女です。これはボランティア団体なのですが、セーリングクラブのクラブハウスのオープニングということで、私たちキャンペーンの側が資金集め、そういったものに協力をいたしました。これがセーリングクラブの会長さんですけれども、この写真でとてもうれしそうですよね。



Enabling: the opening, by HRH Princess Anne, of the new club house for Liverpool Sailing Club. The Campaign helped in assembling a range of partners and a funding package as part of an Interreg project.

Mediating: The Mersey Estuary renewable energy study – the Campaign's role in promoting informed and balanced discussion among partners about the options for generating electricity in the Estuary



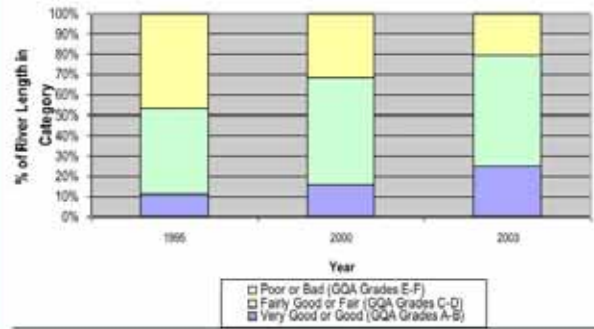
仲介するというので、これはマージ川での潮力による発電です。これはいろいろ論議がある、いろいろなところで話し合いが行われなければいけないものなのですが、このキャンペーンの側で、それについて議論をするような、そういった仲介的な役割を果たしました。ここのところを見ていただけですとわかりますように、右に書かれているのがマージキャンペーンのところでは、政府側の開発の部門のロゴが出ていまして、左側は実際の開発が行われている、開発会社のロゴが表示されています。こういう形で三者が協力してやっているわけです。



Enhancing: Through its Healthy Waterways Trust, the Campaign has promoted an innovative oxygenation project in which oxygen is pumped into a 3km stretch of the Manchester Ship Canal at Salford Quays, allowing the return of aquatic life.

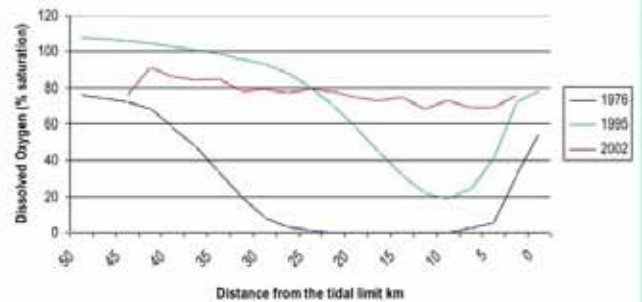
これは強化するということの1つの例です。マンチェスターシップカナル、マンチェスターの河川運河は非常に汚れておりますので、その建物は酸素を送るという施設になっておりまして、3kmにわたってポンプで酸素を送るという、そういったプロジェクトです。これは非常に画期的な機械が入っているのですが、これを運河に沈めて、酸素を送っているということです。

General Biological Quality of Rivers



これは、ここで生物学的な水質を見ているのですが、明らかに改善されているというのがわかります。

Dissolved Oxygen Levels



これは酸素の含有量です。どれだけ水の中に酸素が含まれているか。



Communicating: the website enables a two-way flow of information and comment between the Campaign, its partners and the general public.

これは、コミュニケーション、伝えるということです。これはホームページ、ウェブサイトで、17,000人も多くのユーザーがいるという形でコミュニケーションを行っています。

3. マージ川流域キャンペーンの効果



こういったキャンペーンを行って、この25年間、マージ川への影響、インパクトはどういうものだったでしょうか。

Salmon in the Mersey



そういった統計などよりも本当に重要だったのは、実際にサケがマージ川に戻ってきたと。ですので、この写真はそのシンボルになるような、川にいい魚が戻ってきたという、それをあらかず写真になっています。

Waterside Regeneration



これは、ウォーターフロントの部分の再生ということで、こういったところは、東京でも水辺の再生を数多くやられておりますので、その辺で多くの共通点が見られると思うのですが、こういった建物を建てて再生するには、やはり汚染されていなければならないということです。これはマージ川に沿って建てられた、新しいコンベンションセンターということで、本当に数多くの方が毎年、このコンベンションセンターを訪れています。



Waterside Regeneration

こういった開発は、川がひどく汚染されていけば絶対にできないものになります。実際、シップカナルですけれども、ほんとうに川が汚れていて、昔はその川に流れている油で火事が起きてしまう、そういったことも起きてしまうほど汚れていたわけです。今はその状態がよくなっておりまして、新しく、いろいろ、住宅とか、それから、さまざまな開発がこの地域で行われています。



そして、そういった建物を建てるということだけではなくて、水辺のところでは緑をつくるということ、それも非常に重要になります。これはマージ川の川辺になりますけれども、ここ100年でこれだけの空き地があったという状態はなかったんです。これだけ緑の空き地をつくり出しました。その写真に出ているのは、一緒に仕事をしてきた者ですけれども、地域の人たちと一緒にこういったプロジェクトを行って、そして、地域の人たちのアイデアを取り込んで行っていくということをいたしました。



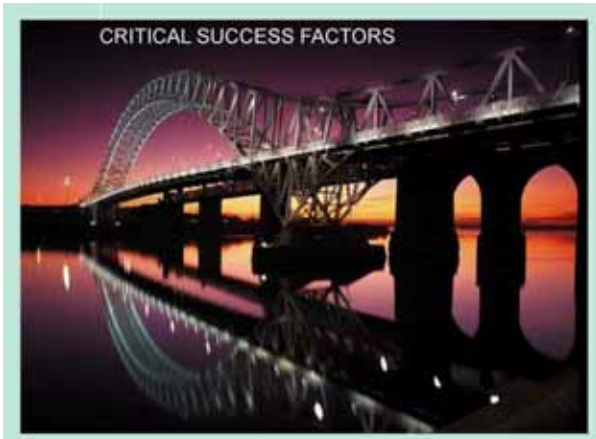
Debris and litter are a recurring problem in areas of waterside regeneration

ただし、まだ問題も残されているわけです。こういった形で、がれきとかごみとかはまだある。これに関しましては、一般のそれぞれの人たち、それから、企業のより強い取り組みがこれから必要になってきます。



ただし、今まで私たちが達成できた大きなことは、その住む地域の人たちが参加して、活動と一緒にやるということです。昨年、「マージー流域 week」という、そういった週間を設けました。そして、その期間に350ものイベントが行われて、4,500人以上の人たちがその活動に積極的に参加するということになりました。

4. マージ川流域キャンペーンの成功要因



ここ3～4年、これだけの成功をおさめた理由は何なのだろうかと、そういったことを考えるようになりました。多分、この成功の理由がわかれば、ほかの地域でもそれを参考にもらえるのではないかということで、特にこの3～4年、何で成功したのかということ进行分析してみようになりました。成功には幾つかの重要な理由があると思いますので、それについて説明したいと思います。



はっきりしたビジョンを持つ、だれにでもわかりやすい、明確なビジョンを持つということが非常に重要です。私たちの場合、マージ川に魚を戻すと。それは非常にわかりやすいビジョンで、だれでも理解できるものだったのです。

そして、集中、フォーカスです。きちんとした規制を設けるということです。環境省、当局が川に対してしっかりと規制を設けるということをきちんと集中して行ってくれたということです。



そして、パートナーシップも重要な要素になります。1つのセクター、また、1つの団体だけではこういったことを行うことができません。ですので、複数のセクター、また、団体がパートナーを組んで行うということ、それが絶対に不可欠な要素となります。

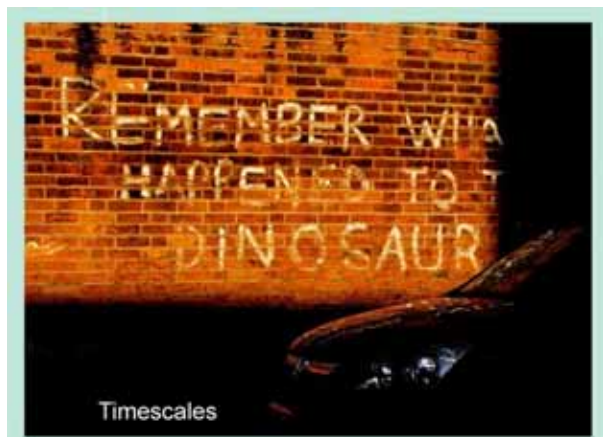


その次に、リソースです。これだけ大きな事業になりますので、非常にお金がかかるということになります。そのうちのインフラは、これは民間の会社なのですけれども、水道会社、ユナイテッドユーティリティーというところがほとんど行いました。水道を使う人たちのお金によって払われたということです。これは排水の処理施設です。マージ川のこういった横にこれだけ大きな施設をつくるということで、これは非常に大きなプロジェクトでした。そして、今もこのユナイテッドユーティリティーという水道の会社は投資を行っているということで、資本の投資を継続的に行っています。



適応力です。25年にわたるプロジェクトですので、だれも予想することができないようなことも起きるものです。気候の変化、これは政治的にも非常に重要な問題になっているのですけれども、この気候の変化によって、昔に比べて極端な変化が起きてしまっているということです。そして、例えば洪水にしま

しても、洪水を防ぐということが10年前に比べて、より優先順位が高い、緊急の問題になってきています。



タイムスケール、期間です。先ほど申し上げましたが、25年にもわたるプログラムは、イギリスの政府にとって、ほんとうに今までにない、長い期間にわたるプログラムでした。そして、先ほど申し上げたように、これだけの期間をとったというのは適正なことだったと考えています。



実際に行うということが非常に重要になります。ただキャンペーンをやっているということだけではなくて、実際に信頼を得るためには、具体的な活動を行っていくということが重要です。このマージ流域キャンペーンでは、地域での行動、地域のアクション、環境のためへの行動がいかに重要かということをお忘れずに行ってきました。これはボートです。これはマンチェスターの中央部にある運河ですけれども、そこから、ごみというか、汚れた物をとるためのボートになっています。それはその地域の問題を解決するために、それに合った解決策を出すということでこれを行いました。



その次に、コミュニケーションです。私たちはいろいろな形でコミュニケーションを行いました。これは私たちが出していた『source』という雑誌ですけれども、これは1万部配布されまして、非常に高い水準のコミュニケーションを行いま

した。このキャンペーンにとって非常に効果的なコミュニケーションを行うというのがほんとうに肝心かなめ、非常に重要な部分になります。



次は、リーダーシップです。リーダーシップといっても、政治のリーダーシップ、また、会社の社長さん、そういったリーダーシップだけではありません。このリーダーシップはいろいろな場所で必要になってきます。例えば地域の中で環境のためのいろいろな活動を行う上でもリーダーシップは必要です。



人は組織よりも重要だということで、ここに出ているのは私たちのすばらしいスタッフの写真になります。日本はどうかかわからないのですけれども、日本でも同じことがあるかもしれないんですが、イギリスでは組織構造が非常に複雑なために、何かやろうと思っても、あまりにもそこら辺が複雑なので、やる気がうせてしまう、そういったことが起きてしまっています。いい人はいい結果をもたらすことができるのだと。組織構造がどうなっても、適正な人がいれば、きちんとしたい結果をもたらすことができるということがわかりました。

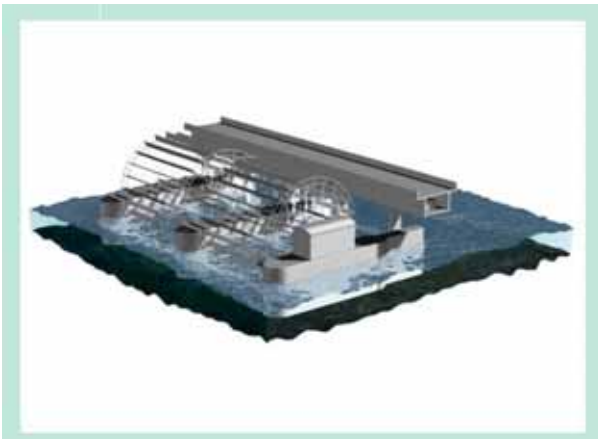
5. これからの挑戦



将来への挑戦のお話をする前に、1つお見せしたいところがあるのですが、これもマンチェスターシップカナルの写真です。この部分ですけれども、先ほど言った、住宅とか、さまざまな開発が行われている場所になります。ここ、特に右側のところが非常にエキサイティングなことなんですけれども、これはBBCの建物になります。水質がよくなっていなければ、こういった開発、また、BBCがこういったところに建物を建てるなどということが可能になることはできませんでした。



でも、こういった改善はされているんですが、将来まだやらなければいけない大変な問題が残されています。EUの中で、European Water Framework Directive、これは規制になるので、水の水質の規制、そういったものが非常に重要になってきます。EUのこの規制は、そこでは、生態系のいい状況を川の流域全体で達成しなければいけないという要件が入っています。生物学的、化学的ないい状態、クオリティーも1つの分析の方法、評価の方法ではあるのですが、エコロジカル、生態系の状況を改善するというのは、そういったものよりもより難しい、より達成が難しいものになってきます。



次はエネルギーということで、イギリス全体では、エネルギーの供給をきちんと確保するというものが大きな問題になってきています。そして、カーボンの排出をなるべく減らして、また、再生可能なエネルギーをできるだけ利用する、そういった方向に進んでいかなければいけません。可能性として、マージ川では非常に高い潮力がありますので、そこで多くの電力、リバプールに必要なかなりの電力をそこからつくるといった可能性を持っています。ただし、マージ川河口で、そういった潮力による発電を行うということには、大きな、技術的、経済的、環境的な問題点、疑問が残されています。こういった河口の地域は、国際的にも鳥の生息地として非常に重要なところになっています。ですので、非常に難しい選択を迫られるということになってしまいます。



これは気候の変動ということで、イギリスの北西部では非常に長い海岸線がありまして、海拔が上がってきてしまっています。これはよく見てもらうとわかるのですが、リバプールの街のちょうど中心街が水に浸ってしまっているという状況をコンピューターグラフィック、CGでつくっています。もちろんこういったことは起きてほしくないのですが、いろいろ研究すれば研究するほど、こういったことも可能性があるんじゃないかというような警告が出てきてしまっています。



これから先、維持可能な開発を行っていくということは大変なことです。今、マージ川流域で生まれた赤ちゃんは、22世紀までずっと生きていくはずなんです。ですので、こういった赤ちゃんに将来どんな状況が求められているのかということを考えていかなければいけません。



最後に、遺産ということです。マージ川流域キャンペーンはその仕事を既に終わりました。私たちはいろいろな情報をこの機会にたくさん集めましたので、こういったレガシーウェブサイトということで、そこに今まで私たちが行った状況がすべて入っていますので、ご興味のある方はぜひこのウェブサイトに行って、見てください。

ご清聴ありがとうございました。ぜひ皆さんからのコメント、ご質問をお受けしたいなと思っています。

質疑応答

個人情報保護の観点から、質問者氏名が分かる部分は加工しました。
司会：佐合純造（JRRN 事務局長）

【司会】 どうもありがとうございました。非常にわかりやすく、また、興味深いお話をありがとうございました。

それでは、ウォルターさんもおっしゃられたように、時間を半分、1時間ぐらい残していただきました。また、事前に伺ったところ、ウォルターさんはこういうディスカッションがお好きだと。ぜひ皆さん方からいろいろなご意見をいただいて、あとに残り、有意義な時間を使いたいと思います。また、ここに来られている方はいろいろな分野の方がおられると思いますので、いろいろな質問や意見が出てくると思いますけれども、よろしく願います。

では、挙手してお願いいたします。

【質問者 1】大変ありがとうございました。マージ川の細かいことは少しずつわかっていたんですけども、全体的な話を聞いたのは初めてでした。1つご質問ですけれども、マージ川流域キャンペーンの実施主体はどういう組織なのか、その組織構造についてもう少しご説明していただきたいと思います。

【講師】実際に、キャンペーンの会長は、イギリス政府の環境大臣によって任命された方になります。ですので、会長はイギリスの政府と直接の関係を持った人ということです。

そのところで、ガバニングカウンシル（運営会議）という形でそこを管理するような団体があるんですけども、その中には30以上の団体が入っているという形になっています。その運営会議の中の30以上の企業に、例えばすべてのセクターから入っている。政府、地方自治体、ビジネス、そういった形でさまざまなところからの人たちがそこに参加しているという形です。

毎年、この運営会議の人たちが、キャンペーンの戦略がどういうものになるのかということを確認しています。私はチーフエグゼクティブだったのですけれども、毎年、ビジネスプランを運営会議に対して提出するという、それが私の重要な役割でした。ですので、その意思決定を行うのが運営会議になります。

それに加えて、アドバイザーカOUNCILという形で、専門家の人たちが入った、アドバイスをってもらう機関をつくりました。例えばそのうちの1つは、コミュニケーションとかメディアの担当です。そのアドバイザーグループのところには、ラジオとかテレビとかメディアとか新聞とか、あと、コミュニケーション、PRの専門家、そういった人たちが入っていました。ですので、運営会議が意思決定をして、そして、アドバイザーグループが提言を行うという形です。

実際に行うのは2つの組織がありまして、一つは、非営利団体のマージ川流域ビジネス財団で行われる。それは非営利の会社になります。そして、もう一つは、チャリティーのためのチャリティートラストというものです。

こういう形でいろいろなところが入っていて、複雑な構造になっていますので、説明にちょっと時間がかかるなと思いましたので、今日はお見せできなかったのですけれども、でも、実は組織図がありますので、よろしければ、その組織図をお送りいたします。

資金がどういうふうなところから来ているのかということにもご興味があるのではと思うんです。もちろん、中央政府から、一部、お金をいただいていた。ただ、私たちの役割で、政府から来るお金だけではなくて、それ以外の資金の調達も行ってきました。例えば、EUとか民間の会社とかそういったところからの資金も集めました。ですので、資金もいろいろなところから集めたということになります。

お答えになりましたでしょうか。

【質問者 1】1年間の予算は大体幾らぐらいでしたか。

【講師】200万ポンドですので、日本円でどのぐらいになるでしょう？（3億円程度） 実は一番大きな投資をしていただいたのは、水道の会社ですが、それは含まれていません。水道会社からの投資は含まないで、その額ということです。そこが一番大きなお金になります。その水道会社の投資しているお金は、マージ川流域キャンペーンがコントロールしているわけではないのですが、影響力を持って、そういうふうなお金を使ってもらうようにしたということです。

【質問者 2】少し歴史的なことを聞きたいんです。今、直前の組織図をご説明いただいた。1994年ごろに、我々、鶴見川流域で活動するNPOですけれども、マージ川流域キャンペーンと共同のシンポジウムをやったことがあるんです。

そのとき伺った組織は、イギリスの環境省からお金を受け取って、事務局に提供するマネジメント組織があって、マネジメントカンパニーと聞いていたのです。それにぶら下がる形で、先ほどNPOとおっしゃっていた事務局組織があって、そのオフィスにいる若者たちがファンドレーティングをしていたのです。マークとトニーと聞いていました。それと別に、多分、マネジメントカンパニーがお世話をする、保証をつける形で、ファウンデーションという、企業のお金を集める組織があって、そのトライアングルになっていたと理解しています。

今のお話を聞くと、そのマネジメントの組織は、権限もコントロールもある意味では、以前よりも集中して、責任が大きくなっている。具体的に言うと、マージ川流域キャンペーンを25年で終了させるに当たって、その間、政府の関与は当初より大きくなっていったんじゃないかと思うんです。

【講師】非常にいい質問です。その組織構造がどうなっていったかということすべて説明しますと時間がかかり過ぎますので、それはちょっとここではできないのですけれども、基本的に、おっしゃったとおり、組織構造は変わりました。

私とそのキャンペーンで仕事をするようになったのは2002年からです。そのときの会長が、組織構造が複雑過ぎると考えました。いろいろな組織が絡んでいて、そのためにうまく機能していないという状態で、複雑な構造になっていました。そうでしたので、そのときの会長がそれをよりシンプルにして、きちんとした形に変えようということになったわけです。

新しいチーフエグゼクティブということで私が入ったときには、新しい、よりシンプルになった組織構造になっていました。会長と運営会議、また、政府、そういったところと一緒に仕事をしてきたわけですけれども、全体の組織をよりシンプルにしていくということを行ったわけです。ですので、状況が変わった、組織構造が変わったというのはおっしゃるとおりです。でも、よりよくなったのではないかなと思っています。

政府からの関与が大きくなったのではないかとおっしゃっておられましたよね。非常に興味深い点だと思います。こういったマージ川流域キャンペーンのような事業を行うためには、政府と良い関係を持つということは非常に重要になります。ただ、それと同時に、私たちの仕事として、物事を変えていかなければいけないということもあるわけです。ですので、キャンペーン側と中央政府の間では、お互いの緊張関係みたいなものがあったわけです。

もちろんこのキャンペーンが始まったというのは、その当時の環境大臣のマイケル・ヘゼルタインという方が始めた。それがなければ、これは行われなかったわけです。でも、彼はほんとうに例外的に、非常にダイナミックで、また、野心家の環境大臣でした。彼はサッチャーを何とか壊そうとしたけれども、失敗してしまったという、それだけの勇気を持った方だったのです。

そして、マイケル・ヘゼルタインという方は、25年ずっとこのキャンペーンと友好的な関係を持ち続けました。最後のカンファレンスのときのキーノートスピーチはこのマイケル・ヘゼルタインさんが行いました。ただし、この間には、何人もの環境大臣がいりました。そして、政府の中でも、こういっ

た事業に対してどの程度熱心かというのは、いろいろな、さまざまな対応でした。

【司会】基礎的知識がないと、ちょっとわかりにくいかもしれませんがね。しかし、それはさておきまして、皆さん方、別に今のお話と関連しなくても結構ですので、ぜひいろいろなことを聞いていただければと思います。

【質問者3】このキャンペーン自体、2010年、今年で終わりということで、そのキャンペーン事務局が解散したのかするののかという話を聞いているんですけども、先ほど言われた、お金を集めるところのビジネス基金とか、あと、チャリティートラストはどうなっているのでしょうか。というのとあわせて、まだ今後、WNTへの適合なんかで、さらにそういう環境維持管理活動を続けなければいけないのですけれども、どういう枠組みで続けていかれるというふうに考えるのか、教えてください。

【講師】このキャンペーンは、25年間のプログラムという形で行われたものです。3年ぐらい前に、この25年が終わったらどうすべきかということで、かなりの議論が行われました。キャンペーンという形で、25年たってもそのまま活動を継続すべきか、それとも、ここで一旦、25年が終わったということで終わりということにすべきかということです。想像できると思うのですけれども、皆さん、意見はさまざまでした。

3年前にそういった議論を行ったときの基本的な質問というのは、イギリス政府に対して投げかけたものでした。25年たってしまった後でも、イギリス政府からこのキャンペーンに対してきちんとした支援を受けていくことができるのかどうかと。結論的に、それは無理だろうということになったわけです。

こんなにうまくいったのだったら、どうしてそれがだめということになってしまったのかと、多分、皆さん思われると思うんです。ですので、ちょっとご説明したいと思います。このマージ川流域キャンペーンというのは、イギリスの中では唯一のもので、こういった川の流域はそしかないものになります。これが1980年代にそういったひどい状況だったということがあって、こういったキャンペーンが行われるようになったという背景があったわけです。そして、政府としても、リパブルでの暴動に対して何か対応しなければいけないと、そういったものに迫られていたわけです。ですので、これは特別なケースとして行われたものということになります。

今の問題として、マージ川流域はある程度の標準まで改善することができた。そういうふうになってくると、マージ川流域はもはや特別な場所ということではなくなってしまったということです。

ここですけれども、先ほど言った、EUのWater Framework Directive というところでは、マージ川流域だけではなくて、すべての川の流域である一定の生態系の標準を達成するようにといった、そういった要件になっています。ですので、政府のほうでも特別なイニシアチブとして、すべての川の流域で金を出すということは、そこまではしたくないと。スコットランドもありますので、そこまではしたくないと。ですので、多くの人でこれだけよくやって、まだやることがいっぱいあるじゃないかと言う人もいたのですが、このキャンペーンは終わりということにしたわけです。

ただし、すべてをクローズしたというわけではありません。プロジェクトとか活動はほかの組織に移行されました。例えばビジネスでやっていたところですが、環境に対する賞みたいなものやっていたのですけれども、そういった活動も継続しています。それはビジネスの環境賞みたいなものです。Business Environmental Award というものをビジネスに出すというのを継続しています。それから、先ほど言ったチャリティートラストですが、それも継続しています。ですので、マージ川流域キャンペーンで行われていることで継続しているものはあるのですけれども、すべて行っているという状態ではないということです。

私の考えですと、すべてのそれぞれの川の流域で、こういったマージ川流域キャンペーンみたいなことを行うべきだと思います。でも、現実的にはちょっと不可能ですね。

【質問者4】国の背景とかがよくわからないので、ちょっと教えてほしいのですけれども、プレゼンテーションの中であれば、マージ川の汚染の原因はそもそも何であったのかと、その汚染の原因をどうすることによって解消できたのか。

日本であるならば、河川の水質に対する責任は、割と国でやったり、公共的セクターが持っていると思うんです。ですから、例えば40年ぐらい前だと、工場の排出基準を厳しくすることによって水質を改善したり、この20年ぐらいだと、下水道の普及率が一気にアップしたことによって水質が改善してきたと思うんですけれども、そういうふうに、水質の責任は大体、公共団体だと思うんです。

ですから、戻りますけれども、今回説明いただいた、汚染の原因と、それを実際にどういうふうに働きかけて改善していったのか教えて欲しいです。

【講師】理由といいましても、これが1つというものはないので。そういった汚染はさまざまなところから出てきてしまっているのです。もちろんそのうちの大きな要素は産業です。そういった汚染を出すような産業から来ていると。先ほど言ったように、それは規制を強化することによって対応したということです。そして、多くのそういった汚染を出すような産業はできなくなって、仕事をやめてしまったというような状態になったと。

それから、農業から出てくる汚染もあります。農家の人たちが土地を汚染して、そして、汚染された土地によって水が汚染されると。それは今でも問題になっています。私の意見では、そういった農業に対する汚染の規制はまだ十分にできていないと思っています。

そして、1980年代の初めというのは、下水が直接に川に流れるというような、そういった状況でした。そのために、先ほど言った水道の会社、ウオーターユーティリティという会社が多くの投資を行って、そういったものの処理にお金をかけたということです。

おっしゃられたとおり、ほとんどの国ではそういったものは政府の責任になります。イギリスの場合はそこまで単純にはいかないのです。というのは、1989年にサッチャー首相が水道を民間会社にしたということがあります。ですので、状況がちょっと違うのかもしれません。ですので、その水道の会社は民間の会社ですが、そことの関係が非常に重要になるということです。

これはちょっと不思議に思われると思うのですけれども、政府が水道の供給を行っていたときよりも、民間の会社になってからのほうが投資が毎年非常に多く行われるようになりました。ですので、民間になってから多くの投資が行われたということで、それによってかなりの水質の改善が見られました。これは政治的なことと言っているわけではないのですが、実際、そういったことだったということです。

【質問者5】さっきから所属を言っていなかったの、申しわけないです。先ほど、鶴見川の話がありましたけれども、同じように、鶴見川流域で活動しております。以前にマージ川流域キャンペーンを見学させていただいて、先ほど出たマークさんとトニーさんに日本に来ていただいて、鶴見川でお話をさせていただいた。そのときのことで、今日から数年前にたしか、リバーフロント整備センターでマージ川の取り組みがもう最終段階に入っているときの話を聞いたのとあわせてです。

一つは、感想として、始められたころの取り組みでは、市民の活動とか、あるいはそれにかかわる学校とか、地域の具体的ないろいろな改善の話のプレゼンテーションが非常にあったのが印象深いのですけれども、一方、終了に近づくにつれて、前回も、非常に大規模な水辺の開発であるとか、どちらかという、政府とか企業じゃないとできないようなことが成果として

報告されていたように思うんです。その辺も実際のキャンペーンを進める組織の方向が変わってきたのかなというのを印象としては持っています。

その中で、始めたころ、25年の期間を設定するに当たって、子供が大人になる、物事の判断できる大人になるまでこれを続けるんだというのが何か1つポリシーとしてあったように思うんです。これはすばらしい、説得力のある話だなと思っていました。そうすると、当時、始めたころにかかわった子供たち、学校の数がこれだけ増えていったというのをグラフで見せていただいたと思うのですが、その子供たちが今、大人になって、このキャンペーンに対してどういうふうに感じているのかというあたりは何かフォローはされていないんでしょうか。

【講師】最後に言われた質問については、私のほうからはその辺はちょっと回答できないのですが、その前に聞かれたことについてはお答えしたいと思います。

先ほど言われた、地域の人たちがやる小さなプロジェクトと大きなプロジェクトのバランス、その辺は非常に重要な点だと思います。両方とも重要だということは言えると思うのです。今、大きなプロジェクトとして、最近このキャンペーンがやったというのは、マージ川の河口の発電のプロジェクトです。これは非常に大きなプロジェクトということで、キャンペーンがこれに参加しないということは無責任なことになってしまいます。

先ほど、今までの100年間で緑の空き地がこれだけ広くマージ川の横にできたというのが初めてだったというお話をしましたが、いろいろな理由があって、そういったプロジェクトの調整役をやるのに、やはりマージ川流域キャンペーンが最適な組織だったと思います。

ただし、そういった大きなプロジェクトはやっているんですが、先ほど言ったような、小さな地域の活動の重要性も忘れてはいけません。先ほど話をした、マージ川ウイークというものをやったのですが、そのときには、これは小さな活動ですけれども、さまざまな350もの地域活動がその1週間に行われました。ですので、その辺は小さなプロジェクト、大きなプロジェクトのバランスをとって行うということで、その両方に対応するような形でスタッフを雇ってやっていました。

先ほど話はしなかったのですが、七、八年前から、EUのパートナー国と一緒にさまざまな活動を行ってきています。ですので、お互いに学び合うということをしてきました。ですので、私たちだけではすべてに対して回答できないという場合もあります。

【質問者6】ちょっと追加でよろしいですか。もう一つ、一番関心を持っているのは、企業のかかわりなのですが、マージ川流域キャンペーンというのは、ビジネスファウンデーションも持っていて、そこにいろいろな企業が入れかわり立ちかわりというんですか、例えば私が聞いている話では、3年ぐらいの期間で次々にかかわってきてくれていると。そういう企業のつながりも25年間では相当できていると思うんです。そういうものも基本的には全部なくなったのか。

もう一つは、地域レベルのローカルプロジェクトについても、地域の企業を巻き込んでやっていたと聞いているのですが、それは地域とのかかわりがあるから、日本なんかでいけば、一気にチャラになるということはないと思うんですが、そういうものは財産として活用していくような方向は考えていなかったのかなというのをお聞きしたい。

【講師】おっしゃったとおり、キャンペーンと大企業は非常に重要な関係を築きました。先ほど言った水道の会社、ユナイテッドユーティリティがその1つの例であります。シェルUK 石油の会社、ユニリーバ これは多国籍の会社です。ビールホールディングスという、これは土地開発を行うような会社です。そういった大会社というのは、CSR(企業の社会的責任)としてそういった活動にかかわるということに関心を持っています。そして、そういった会社は、ビジネスファウンデーション

ン、基金にも密接なかわりを持っています。それ以外に、小さな会社で、地域の活動にだけ興味を持っている会社もあります。ですので、どういうふうに会社を巻き込むかということは、こういうふうにすればいいとか、こうということは言えないなと思っています。というのは、会社の側ではさまざまな理由でかわりを持つようになってくるからです。

キャンペーンが終わった後、そういった会社との関係はどうなっているのかというご質問ですけれども、回答としては、もう終わりということ。ちょっと残念なことなのですが、そういった大会社は、信頼できる、しっかりとした組織と一緒に活動したいという思いは持っています。25年間やってきたわけですから、評判もありますし、信頼も得てきました。ですので、そういった会社は、私たちとだったら一緒にやれると思っていてと思います。そういった関係を築くというのは、ボランティアの組織ともそうですし、それから、大企業とも、関係の構築というのはなかなか大変なことだと思います。

【質問者7】水分野のNPOに所属しております。3点、今の企業の話と関連してお聞きしたいのですが、キャンペーンのパートナーとなる企業はどうやって集めたのかというのが1点。キャンペーンを進める上で、企業との役割分担は何だったのかというのがもう1点。最後に、投資した企業側のメリットとして何かあったのかというのが3点目。以上、お聞きしたいと思います。

【講師】どういうふうなそういった企業を見つけたかという最初のご質問ですけれども、実はこのキャンペーンに参加してくれたというのは、その会社でいろいろな理由があって参加してくれましたので、場合によって違うので、幾つか具体例を出したいと思います。

シェルUKという会社は、これはマージ川で汚染の事故が起きてしまったのですけれども、それを起こしてしまった責任が一番、起こした側だったということです。それはイギリスの企業として今まで最大の汚染事故という形でした。ですので、そういったこともありますので、シェルUKに対して、このキャンペーンに協力してくださいというふうなことを言うというのは、すぐ納得してくれました。ですので、評判を回復したいという、そういった思いがあったと思います。

ユニリーバは、川沿いに大きな工場を持っていました。10年前、ユニリーバの一番上にいる会長が、世界中の水に対するクオリティーに非常に関心を持っている方だったんです。ですので、一番上の方がそういう考え方でしたので、会社のほうの側から、リパブルを何とかしようという、汚染をきれいにしようというものに対して、企業全体で取り組もうという気持ちを持ってくれたということです。

あとは、ビールホールディングスという不動産会社ですけれども、ビールホールディングスに非常に重要なのは、地方自治体との関係だったわけです。ですので、地方自治体との関係を築きたいという思いがあって、このキャンペーンに参加してくれたと。ですので、このキャンペーンに参加するようになった理由は、企業によってさまざまな異なる理由がありました。

2つ目ですけれども、企業側が果たしてきた役割ですが、一つは、そういった形で、メンバーにはなっているけれども、実際には仕事はしていないけれども、ファウンデーションの役員になってくれたと。

会社側がどんなものを得たのかということですが、もちろん企業ですから、お金だけくれて、見返りに何も期待していないなんていうところはありません。ですので、企業に対してもいいチャンスだし、キャンペーンにとってもプラスになると、そういった何かを考えなければいけなかったわけです。

例えばシェルUKの場合、私たちのホームページ、ウェブサイトはすべて、シェルUKのお金で運営しています。ですので、シェルのロゴがホームページのところにすべて表示されている形になっています。ですので、秘密じゃないんです。そういう形でサポートしているよとすぐわかるということです。

ここ数年、ユニリーバは、地域の活動に対して積極的に参加しよう、私たちもそういった地域活動に対して積極的に参加したいという思いがあります。ですので、ユニリーバと一緒にあって、地域の中で環境に非常にいいことをやってくれた人に賞を与えようとか、そういったことを行いました。ですので、名前がユニリーバアワードという形でした。私たちが組織して、お金を出してもらったと。

ですので、重要なことは、民間企業と一緒に仕事をするることによって得るプラスはあります。ただし、ただですべておごってもらえるものではないよということです。

【質問者 8】鶴見川流域で活動する NPO より来ました。さっき、スタッフの写真が出ていたのですけれども、以前は正の職員が 2 人、そして、プロジェクトが立ち上がるごとに、臨時の職員の方を雇うというようなことだったんですが、さっきの方は全部、正職員なのでしょうか。今、スタッフの処遇はどうなっておられますか。

【講師】マージ川流域キャンペーンに私が 2002 年に入ったときには、いろいろな形で短期間の契約で仕事をされていた方がたくさんいました。それはやめまして、臨時職員はやめて、きちんと正規採用をしようということにしたわけです。でも、一部、パートタイムで仕事をしたいよという人は、それはそれで大丈夫ということです。例えば、仕事をするのでも、フレックスタイムで仕事ができるようにするとか。ですので、そういった形で柔軟に対応したので、サラリーはそんなに高くなかったのですけれども、なかなかいい職場だったんじゃないかなと思っています。

3 年ぐらい前がピークで、約 25 人のスタッフがいました。もちろんそれはお金の問題もありますし、どんなプロジェクトがあるのかということによってその時々で変わっています。今、こういった形でキャンペーンが終わりということになりますので、スタッフは次の仕事をしなければいけないということでもなかなか大変です。今年の 3 月 31 日にクローズしたんですけれども、その時点でちゃんとした仕事がまだ見つかっていなかったという人は 3 名だけでした。

【質問者 9】2 回目ですみません。マージ川流域キャンペーンのスケールについて、以前から、なかなかいいイメージができなかったのですけれども、今日は、職員が 25 人だったと。それから、350 の組織が 4,500 人を動員するようなスモールなアクティビティーがあるという話を聞いて……。流域に 800 万人と。実は鶴見川流域は 200 万人いない、190 万人で、NPO 法人が中心になってそういうスモールをやっているんですけれども、比率でいうと、4 分の 1 にダウンサイズすると全く同じで、我々がやっているようなことを 4 倍にすると、マージ川流域キャンペーンだと、今日は非常に親しい感じで。

それで、自分の質問ですけれども、我々の鶴見川流域での活動は、いろいろな形で国の事務所が応援してくれていて、流域でつながっていると。多分、国の活動がなくなったら、流域でつながるのは極めて難しい。今、日本国は地方分権が盛んに言われているのですけれども、流域にかかわる地方政府は、お互いに協力して流域をやるなんていう気はさらさらない。ほんとうに全くないのです。マージ川流域の場合に、そういう流域の調整をしていた仕事が地方政府に分担できるのかできないのか、希望があるかないかというのを。

【講師】そういう形で地方自治体がなかなか合意を得られないという話を聞いて、非常に興味深いなと思いました。私も非常によくわかります。1 つの例では、リバプールとマンチェスターもお互いにライバルだと思っているのです。でも、ほんとうに、文化的にライバルだというのがそれぞれの都市の人たちの意識です。ですので、地方自治体での協力を得るといのは非常に難しいことです。そういった意味でも、イギリスと日本は共通点が多いなと思いました。

【質問者 10】EU 水指令は、そういう問題について、一々、政府が、流域で連携しろという指示を出しているのですか。

【講師】EU 水指令では、水に関することに対して、地方自治体がより責任を持ってやっていかなければいけないとなっています。そして、イギリスでも、イギリス政府では、地方自治体に対して、例えば洪水に対する対応に関しても、地方自治体により責任を持つようにというふうにしました。ですので、5 年前に比べて、水の管理が地方自治体にとってより重要性を増してきています。ですので、そういった状態が起きるなどというのは、今見えてきているのです。

そこでの問題では、イギリスの場合、地方自治体の中で水に関する専門家がほとんどいないという状態だと。

【質問者 10】日本も全く同じです。

【講師】ですので、数多くのトレーニングのプログラムを地方自治体で仕事をする人たちに対して行ってきました。それに関しては、EU からお金を出してもらって行っています。それから、水道の会社からもお金をいただきました。

そういった場合には、キャンペーンというのは非常にいいのです。というのは、政治的な団体ではないので、そういったことを行うにはキャンペーンの組織は非常に適していました。ですので、これは将来にとっては地方自治体の問題は大きな問題になるのではないかと思います。

【質問者 11】民間企業のコンサルタントです。最後から 3 枚目のスライドのシミュレーションですけれども、それにつきまして。

これは非常にショッキングな内容なんですけれども、これは単なる啓蒙活動のための絵なのか、それとも、専門家が検討した結果のことなのかというのが質問です。

それともう一つございまして、この温暖化のレベルなんですけれども、今、世界で議論されているレベルのどのレベルなんでしょうか。

【講師】これは、先ほど話さなかったのですけれども、マージ川流域キャンペーンと大学と一緒に取り組みを行ってきました。ですので、そのところで、実際のエビデンスをつくり上げていかなければいけない、ちゃんとリサーチしたエビデンスをつくるという意味で、大学と共同で行うということは非常に重要でした。特にリバプール、マンチェスターにある大学と密接な関係を持って行ってきました。実際に、最後のキャンペーンの会長さんはリバプール大学の教授の方でした。ですので、キャンペーン自身がこういったリサーチをするというのではなく、大学にいる学術部門の方たちと一緒に協力してリサーチを行いました。

これは、マンチェスター大学のほうで、気候の変動がイギリスの北西部で起きた場合、どんなことが起きる可能性があるのかという研究をして出てきた 1 つの写真、いろいろなシナリオを想定して出てきたものの 1 つということになります。これはこういった状況でというものがあったのですけれども、今、ここでそれがどんな状態になったときにこういったことが起きるのかということでは具体的には覚えていません。

【質問者 12】大学で研究している者です。話の中で、パートナーシップが非常に重要だというお話をされていました。それで、パートナーシップは大事なのですが、川の活動ですと、川の周辺だけじゃなくて、大きく言えば、流域の中での活動というものですべて、川の環境とかにつながっていると思うんですけれども、ですので、それぞれの多様な活動が関係してくると思うんですけれども、そういういろいろな活動をつなげていくということは具体的にやろうと思うと非常に難しいことで、マージ川流域ではいろいろな活動をされているというのは、具体的にどういう工夫をされていたのか、どういう人たちがどうい

う取り組みで皆さんをつなげてきたのかということをご質問したいのですが。

【講師】非常にいい質問なのですが、マージ川流域キャンペーンでそういったものをすべてうまくつなげて調整するというのは不可能です。ですので、毎年、何を行うのか、その優先順位づけをするということが重要になってきます。ビジネスプランという形で、毎年、私たちは、これはやろう、これはやらないということを決めていきました。ですので、先ほど言ったガバニングカウンシルのほうで、何が重要なのか、何をしなければいけないのかということを決めたということです。

リソースも限られておりますので、そこでできるということは限られますから、その中で優先順位をもって、これがということだけを行っていたということです。

【質問者 13】1つだけ聞かせてください。さっき、今年でマージ川流域キャンペーンが終わりだということですが、この成果というか、この活動は、イギリス国内のほかの川にも広がったらいいなとちょっと言われたのですが、実際問題、ほかの川で同じような活動が起こったのか起こらなかったのか、これからの期待があるか。

さっき言われたように、国のお金が入ったからできたのか、入らなくてもできるような状況にあるのかなのか、その辺をちょっとお伺いしたい、イギリスの中での話なのですが。

【講師】将来、これと似たような形のキャンペーンは行われるようになると思うのですが、その行われるようになる理由は今回の場合とは異なると。このマージ川流域キャンペーンが起きた理由は、水質が非常にひどい状態だった、そして、それによって経済発展が妨げられていたと、そこが理由でした。

ですので、これから行われるキャンペーンでそういった理由で始められるところはないと思います。というのは、一般的に言って、水質はかなり改善されてきているからです。でも、先ほど言った、洪水の問題、また、水を管理していくという、そういった問題が今までよりも大きくなってきていますので、そういった理由で、イギリスとかスコットランドで同じような形のキャンペーンが将来出てくる可能性は高いと思います。どうなるか様子を見るということになると思います。

【質問者 14】簡単に。上下水道のコンサルタントをやっております。シェルUKというのは水道の民営化で管理をされている企業と伺ったのですが、それは下水処理場も入っているんですか。

【講師】そうです。両方やっています。

【質問者 14】そうしますと、水道の点から見ますと、いい水をとりたいということで、下水処理場の位置とかもいろいろ変えたりされたのですか。

【講師】場所を変えたというよりも、最初は全くそういった下水処理場がないということもありました。1970年代は、ほとんど下水はそのまま川に流れているというような状態でした。ただし、今、古いインフラの中では、これから変えなければいけないものも出てきています。こういった都市は19世紀に建てられた都市ですから、下水でもいろいろ壊れてきたり、さまざまな問題があります。

【司会】では、お疲れさまでした。たくさんの質問をわかりやすくお答えいただきまして、本当にありがとうございました。

(拍手)

非常に充実した時間を過ごせたということで、本当にありがとうございました。私だけではなくて、皆さんもきっとそうだと思います。どうも大変ありがとうございました。

以上で、JRRN 河川環境ミニ講座を終わらせていただきたいと思っております。今日は皆さん方、お越しいただきまして、ありがと

うございました。また次のご案内をさせていただきますので、また次もぜひ来ていただけますように、お願いいたします。

講演者プロフィール

講演者プロフィール

Walter Menzies 氏



マージ川流域キャンペーン（MBC）専務理事

1983年から北西イングランドにおけるランドワーク活動でのディレクター等を歴任し、2000年より現職。

マージ川流域キャンペーン

イギリス北西部に位置するマージ川流域において、河川、運河、河口の浄化と再生を中心に、1985年～2010年までの25年間に渡り実施された政府主導の事業。世界で初めて統合的再生を目指した流域管理手法が適用され、世界を代表する河川・流域再生の成功事例となっている。

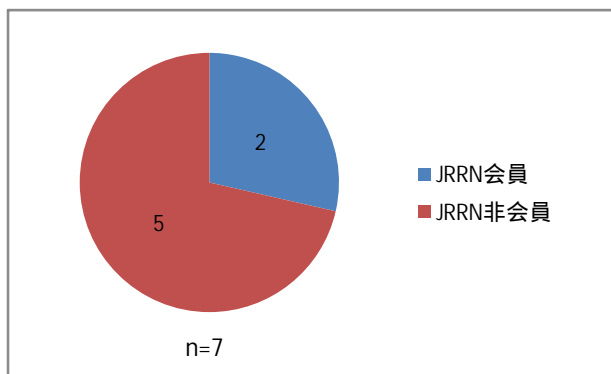
25年間の活動成果は以下のホームページに蓄積されている。

URL: <http://www.merseybasin.org.uk/>

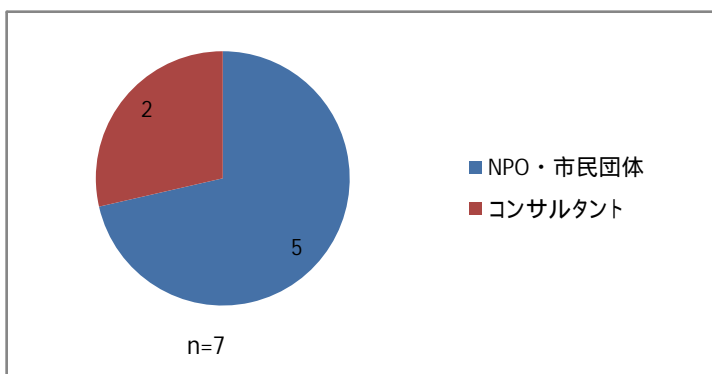
参加者アンケート結果

本行事参加者より頂戴したアンケート結果は以下の通りです。
(回答者：7名)

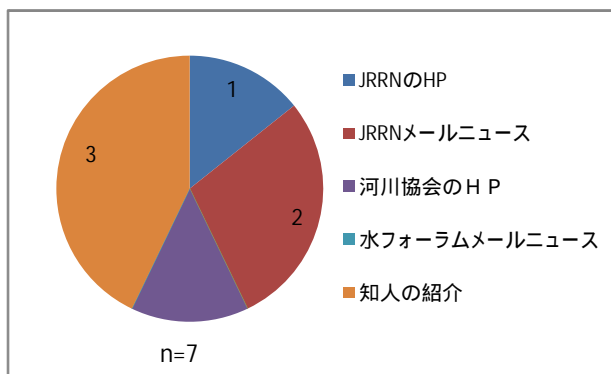
0. JRRN会員・非会員について



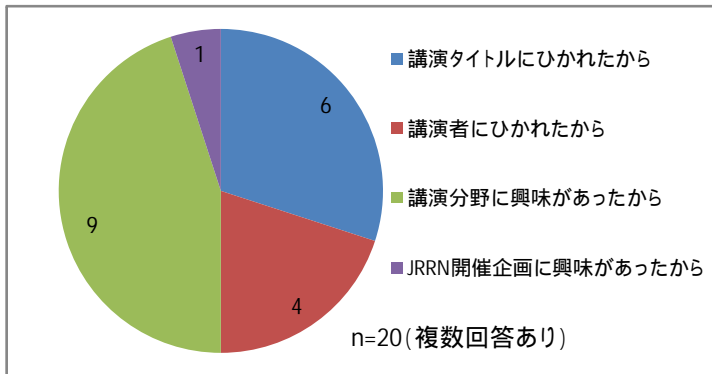
1. 業種、所属団体等をお聞かせください



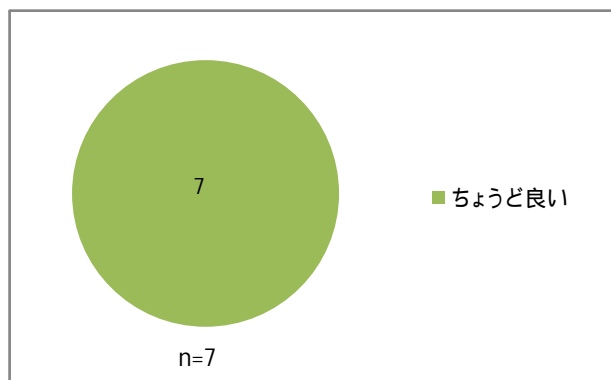
2. 本セミナーをどこで知りましたか



3. 本行事へ参加した理由をお聞かせください。



4. 本行事の内容はいかがでしたか。



5. 興味をもった内容、ご満足頂けなかった点

- ・講演者と通訳者のプレゼンのタイミングが良かったので、非常に内容がわかりやすかった。
- ・マージ川流域キャンペーンの歴史、成果、課程がとてもよくわかりました。
- ・流域水環境改善方策・経緯が理解できた。
- ・キャンペーン終了の経緯(大分わかりました)

6. 河川環境や河川再生に関し興味を持たれている内容や、JRRNに対する今後の期待などがあればお聞かせ願います(今後の企画で取り上げて欲しい内容、テーマ、要望、講演を聞いてみたい講師など)

- ・諸外国の政策的なこと、事業に関することの紹介をしてもらいたい。
- ・温暖化対応策の海外の事例
- ・温暖化対応策に関わる流域視野の試み、とくに海外の新しい試みに関する講演など期待します。
- ・水制度 松井三郎先生(元京都大学)
- ・舟運を活用した地域活性化事例

日本河川・流域再生ネットワーク（JRRN）

「日本河川・流域再生ネットワーク（JRRN）」は、河川再生に関わる事例・経験・活動・人材情報等を交換・共有することを通じ、各地域に相応しい水辺再生の技術や仕組みづくりの発展に寄与することを目的に、（財）リバーフロント整備センターが2006年11月に設立した団体です。また、日中韓が中心となり設立した「アジア河川・流域再生ネットワーク（ARRN）」の日本窓口として、日本の優れた知見をアジアに向け発信し、同時にアジアの素晴らしい取組みを日本国内に還元する役割も担います。

<http://www.a-rr.net/jp/>

第5回 JRRN 河川環境ミニ講座 講演録（2010年5月11日開催）

発行日	2010年7月16日
発行	日本河川・流域再生ネットワーク（JRRN）
事務局（連絡先）	〒104-0033 東京都中央区新川1丁目17番24号 ロフター中央ビル7階 財団法人リバーフロント整備センター内 Tel: 03-6228-3860 Fax: 03-3523-0640 E-mail: info@a-rr.net, URL: http://www.a-rr.net/jp/

JRRN/ARRN 事務局は、「アジア河川・流域再生ネットワーク構築と活用に関する共同研究」の一環として、財団法人リバーフロント整備センターと株式会社建設技術研究所が運営を担っています。



日本河川・流域再生ネットワーク